

## 第45回全日本中学生水の作文コンクール入賞者一覧

賞名	都道府県名	作文の題名	学校名	学年	氏名
最優秀賞 内閣総理大臣賞	群馬県	わさびになりたい	群馬大学共同教育学部附属中学校	3	安藤 周平
優秀賞 厚生労働大臣賞	青森県	日本の水	八戸市立是川中学校	2	小林 千花
優秀賞 農林水産大臣賞	宮城県	大好きな景色と水	仙台市立郡山中学校	3	辻井 珠希
優秀賞 経済産業大臣賞	愛媛県	ダム湖に沈む村	松山市立南第二中学校	3	松平 定久
優秀賞 国土交通大臣賞	沖縄県	水の重み	南風原町立南風原中学校	3	平田 菜乃華
優秀賞 環境大臣賞	滋賀県	手紙 琵琶湖のあなたへ	近江兄弟社中学校	1	福岡 周
優秀賞 全日本中学校長会会長賞	北海道	大切な遊水地と共に	砂川市立砂川中学校	3	水島 颯一
優秀賞 水の週間実行委員会会長賞	静岡県	感動のネットワーク水	磐田市立磐田第一中学校	1	佐藤 迪洋
優秀賞 独立行政法人水資源機構理事賞	埼玉県	「金賞の思いを捧げて」	川口市立高等学校附属中学校	2	合葉 鴻太
優秀賞 シャワーズ賞	徳島県	うちの川	神山町神山中学校	3	中南 仁
優秀賞 中央審査会特別賞	静岡県	清らかな水、尊い水	常葉大学附属常葉中学校	1	西ヶ谷 あかり
入選（29編）	青森県	水の未来を考える	南部町立名川中学校	2	松山 結宇
	青森県	水に惹かれる心	むつ市立関根中学校	3	鳴海 綺音
	福島県	限りある水について考える	須賀川市立第一中学校	3	秋山 北透
	茨城県	祖父のマンションと水	土浦日本大学中等教育学校	2	遠藤 瑠七
	栃木県	人間のWell-being「水」	栃木県立矢板東高等学校附属中学校	3	佐藤 姫香
	群馬県	水という命	群馬大学共同教育学部附属中学校	2	内田 崇法
	東京都	この一滴はどこから	学習院女子中等科	3	下野 理央
	神奈川県	水害から人々の暮らしを守る工夫	聖園女学院中学校	1	植松 舞花
	新潟県	水が創り出す故郷の風景	新潟大学附属長岡中学校	3	新保 心菜
	富山県	美味しい水をいつまでも	黒部市立清明中学校	2	近川 藍子
	福井県	水から学ぶ	勝山市立勝山北部中学校	3	廣田 真里菜
	岐阜県	当たり前とは？	川辺町立川辺中学校	3	木下 真心
	愛知県	水の恵み	設楽町立津具中学校	2	村松 真波
	三重県	僕の決意	高田中学校	1	山崎 健貴
	京都府	水と共に生きる	京都先端科学大学附属中学校	1	三ツ木 文琉
	大阪府	水都大阪と呼ばれ続けるために	大阪府立水都国際中学校	1	村井 柊恋
	奈良県	地域の中で生きる「水」	奈良市立富雄第三中学校	3	落合 ひま
	和歌山県	水の大切さ	開智中学校	1	篠崎 唯奈
	島根県	「天の川のような」	松江市立湖南中学校	3	高草木 晴香
	岡山県	当たり前	岡山県立岡山操山中学校	2	吉田 彩乃
	香川県	水不足	坂出市立東部中学校	2	山中 恋
	愛媛県	命をつなぐ水	新居浜市立南中学校	3	篠原 咲音
	佐賀県	世界を見て	佐賀大学教育学部附属中学校	3	田口 夢彩
	熊本県	「水と生きる」	真和中学校	3	杉本 周優
	宮崎県	ハチドリの水	宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校	2	また 莉央
	宮崎県	「この世のすべては水のおかげ」	宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校	1	田邊 彩乃
	大分県	技術と自然のろ過装置	大分市立大分西中学校	2	池本 すみれ
	中国	水で世界を覗く	青島日本人学校	3	塩沢 里菜
	カンボジア	世界の人々に「透明な水」を	プノンペン日本人学校	3	福井 愛莉

## 内閣総理大臣賞（最優秀賞）

## わさびになりたい

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 安藤 周平

私は、寿司が大好物だ。寿司に欠かせないのが、ツーンと鼻に抜けるわさびの辛さだ。わさびは不思議に満ちた植物だ。私は、わさびが好きが高じて、わさびを自分で育ててみようと考え、わさびの苗を買ったことがある。説明書の指示に従って水槽に水をはり、土を入れ、わさびを植えた。しかし、数日もすると葉が垂れ下がり、ついに枯れてしまった。その後も、水換えをしたり土の質を変えたりしながら、何度もわさびの水耕栽培にチャレンジしたが、最長でも二か月程度しかもたず、わさび栽培は失敗に終わった。

どうしてうまく育たないのか。調べた結果、溜まり水でわさびが育たないのは、わさびの根から、種子発芽や微生物の生育を阻害する物質が放出されているためだということが分かった。わさびが放出するアリルイソチオシアネートという物質は、あらゆる植物の成長を妨げる。他の植物だけでなく、なんとわさび自身も枯らしてしまう。わさびは、自らが作り出す物質で、生命線である水を汚してしまう。いわば自滅する性質を持っているのだ。だからわさびは流水でないと育てるのが難しい。なんと不思議な植物だろう。わさびに対する私の関心はますます高まった。

わさびの成長する姿を見たくて、私は昨年の夏、久しぶりの外出先に長野県にあるわさび農場を選んだ。そこでは、見渡す限りの大きなわさび田に、数千株はあろうかというわさびが整然と植え付けられていた。わさび田には、隣を流れる清流から引き込んだ水が、わさびの間を縫うように流れていた。その水は宝石のように光りながら豊かに流れており、橋の上から見ても、水底の石の粒がはつきり見えるほど澄んでいた。足を浸してもよいコーナーがあったので、わさびになった気持ちで足を入れてみた。真夏の火照った身体が冷やされて気持ちいいと感じたのは最初だけで、一分もしないうちに

冷たさで指先が痛くなり、足を抜いてしまった。これがわさびを育む水なのだと身をもって体験した。

なるほど、これだけ大量の美しい水が流れていけば、アリルイソチオシアネートもあつという間に押し流され、わさびを枯らすことはないだろう。しかし、流れた先には水田がある。下流で稲が育たなくなるなど水質汚染の問題が発生しないのはなぜだろうか。

この問題はすぐに解決した。アリルイソチオシアネートは比較的短時間で揮発してしまうのだ。わさびを食べたときのツーンとした感じが長く続かないのはそのためだ。わさびの毒素はすぐに揮発してなくなるから、下流の植物への影響はなく、水質汚染の問題は生じないのだ。

一方、私たち人間はどうだろう。これまでの歴史を振り返ると、産業発展のため、人間は様々な物質を作り出し、水を汚染した。河川に有毒物質が流入し、日本各地で公害が発生した。現在でも、原発の汚染水の問題を抱える。私たち人間は、自分で作り出したもので大切な水を汚している。生きていく以上、周りの環境に影響を与えてしまうことは避けられない。だからこそ、汚してしまつた「その後」まで考えることが不可欠だ。

私も、わさびのように生きられないか。私たちには、水資源を守り安全な水を次の世代に引き継ぐ責務がある。生きるために作り出してしまつた有害物質を無害にして自然に戻すにはどうしたらよいか。困難な課題だが、私たちの世代がなんとかして解決しなければならぬ。新興国では経済発展とともに、環境汚染、水質汚染が叫ばれている。すでに公害を経験した歴史を持つからこそ、私たちが先頭に立ち水を守らなければならぬ。私はわさびになりたい。わさびのツーンとした辛みを感じながら、私はその決意を新たにしたい。

# 厚生労働大臣賞（優秀賞）

## 日本の水

亡くなった私の祖父は「水をつくる人」だった。四十年以上もの間、市の浄水場やポンプ場で市民のための水を作り続け、みんなに届け続ける仕事をしてきたそうだ。

私の知っている祖父はすでに退職し、優しく明るい、たくさん遊んでくれたおじいちゃんだった。そして私が四歳の時に亡くなったので、祖父の仕事についてはあまり詳しくはなかった。

母から私の知らなかった祖父の働いていた頃の話聞いた。

水道の水は、二十四時間、すべての人に届けることが必要だ。そのため、祖父の勤務は日中働いた次の日は夜勤、夜勤から帰宅した次の日が休みという四日間のサイクルを繰り返していたそうだ。土日が休みではない日も多く、母は家族旅行などもほとんど連れて行ってもらったことがなかったそうだ。

水の作り方は、その日の川や湧き水のコンディションを確認するところから始めるそうだ。にごり方や雑菌の量、PHなどを調べ、それに合わせ、薬品を加える。不純物を凝集剤で取り、ろ過し、塩素を加えて殺菌し、水道水を作る。

大雨や台風などのときは急激に水が濁るため、真夜中でも職場に駆けつけ、水作りを手伝わなければならないときもあつたそうだ。

それから、季節や時間、使用量を調べながら、送水量を考えてそれぞれの地域に水道水を送っていたのだそうだ。

祖父は、「八戸の水は自分たちが守るんだ」と誇りをもって仕事をしてきたそうだ。

八戸の水は「軟水」で、味がまろやかでおいしく、髪や肌がうるつるになる良い質の水でもあるそうだ。

塩素の匂いがある水が嫌いな人も多いが、匂いのない水は送水の末端の、殺菌力の低下した危険度が高い水だということも初めて知った。

青森県 八戸市立是川中学校 二年 小林 千花

水道の蛇口をひねると出てくる水は、かつて祖父が誇りを持ってつくり、今も誰かが私たちに届けようと、心を込めてつくり、送ってきているものなのだと思う。

私にとって、水道水は少しだけ特別なものを感じられるようになった。私たちは日常で沢山の安全な水を使用している。だが、世界には安全な水を飲めず、そもそも水を飲めないという人もたくさんいるのだ。二〇二〇年には安全な水を飲めない人が世界中に二十億人もいる。これは日本の人口の十六倍にもあたる。

日常で使用している水は、当たり前前に安全だと信じているが、その安全は日本に豊富で良質な水があり、誰かが守ってつくってくれたものなのだと思った。

水道から出る水がどこから来たのか、どうやって来たかを知ると、大変な手間がかかり、私たちに届いていることが分かる。そんな水を、これから大切に使いしていきたい、未来の誰かが使えるものへと繋げていきたいと思う。

# 農林水産大臣賞（優秀賞）

## 大好きな景色と水

宮城県 仙台市立郡山中学校 三年 辻井 珠希

“水”と聞いてあなたは何を連想するだろう。どこまでも続く海の水、水道の蛇口から出る水、透き通った湖。世界には様々な“水”がある。そんな中、私が思い浮かべたのは、五月の見渡すかぎりに広がる水田だ。私の祖父母は農家。一面の田んぼは見慣れた景色で私はこの“田舎”と呼ばれる風景が大好きだ。田んぼは一年を通して様々な形状になる。稲作において水はとても重要。そのつながりを特に感じるのが五月に行われる田植え、そして水田だと私は思う。水田や水は稲作においてどんな役割をもっているのだろう。

まず、水田に張られた水には主に三つのはたらきがある。

一、稲を寒さから保護する。水には「熱しやすく、冷めにくい」という性質があり、気温が低くなっても水の中は温かい環境となる。稲は熱帯で生まれた作物なので、気温が低くなると冷害の被害を受けやすい。水が温度調節をしてくれることで稲を冷害から守れるのだ。

二、雑草、病害虫の発生を抑える。田んぼに水が溜まっていると、土の中は酸欠状態になる。この状態では多くの雑草の種子が呼吸できず、芽を出すことができなくなる。また作物に悪さをする病害虫も、水が張っていると棲みづらい環境となるため数が少なくなる。

三、連作障害をなくす。同じ土地で同じ作物を毎年育てていると、病害虫などの被害を受け、収穫量が減ってしまうことがある。水を溜めることで、不足しがちな微量元素の補給ができたり、逆に過剰な成分は水が流し出してくれる。また、二つ目のはたらきで言ったように、病害虫の被害を防ぐこともできる。

このように、水田に張られた水には、多くのはたらきがある。水があることで安定して、おいしいお米を作ることができるのだ。そして水田にはお米をつくる以外にも隠しもった三つのすごいはたらきがあるのだ。

一、水のろ過。水田に入った水は、地下に浸透し、土の中のパイプの

ような水路を通る。この間に、ゴミなどは土の表面で、もっと細かい不純物は土の中で取り除かれてきれいな水になる。

二、洪水を防ぐ。水田の周りにはアゼという、水田と水田の間に土を盛り上げてつくった小さな堤があり、このアゼがあるために水が溜められる。アゼに囲まれた田は大雨のときに雨水をため、その後ゆっくり川に流す。田んぼは、ダムのようなはたらきもするのだ。

三、さまざまな命を育む。水田には、バッタ、トンボ、カエル、タニシ、メダカなど、多くの生き物がいる。堆肥などの有機物を分解する微生物が繁殖し、それを小魚が食べ、小魚を水鳥が食べる。クモや昆虫をカエルが食べ、そのカエルをヘビが食べ、そのヘビを猛きん類が食べる。この「食物連鎖」によって水田では多くの生き物がつながり合っている。

今回は水から一面に広がる水田を連想し、そこから水田に張られた水の役割や、水田の意外な一面などを知ることができた。普段見ていた水田の水にこんなたくさんのはたらきがあることにすごく驚いた。水田にも、お米を育てるだけでなく、自然への貢献があると知り、多くの人が、“田舎”と言っているやがる景色にこんなすごいはたらきがあることを知ってほしいと思った。水が透明なのは水を通して物事を見ることで沢山のことに気付くことができるからではないか。みんなにも普段近くにありすぎて意識しない水を通して物事を見てほしい。近くにありすぎて、当たり前、とさえ思わないものにも意識を向けて生活することで少しずつ社会は変わっていくのかなと、私は思った。

## 経済産業大臣賞（優秀賞）

### ダム湖に沈む村

私の祖父が建てた旧伊予三島市の家は、銅山川のほとりにひっそりと建っている。そこは、奥の院泉龍寺を通り過ぎ、細い山道を進み、金砂湖を渡り、中の川へ入った所にある。家族と春休みに訪れた際、澄んだ青緑色の金砂湖を想像して望むと、今まで見た事のない水位で、底が干あがるほどとなっていた。建物や道路の基礎と思われる跡を見つけ、父がダム湖に水没した村の話をしてくれた事を思い出した。私は、この広大な自然にそびえ立つ銅山川3大ダムにより、どのような水資源開発が行われていたのか知りたいと思った。

銅山川疎水は、「四国三郎」と呼ばれる吉野川上流の銅山川からトンネルを貫き、四国中央市に農業用水を供給している。水源不足による度かさなる干ばつのため、流域変更による分水を求め、下流の徳島県との調整や、ダムにより水没する村との交渉など幾多の困難を乗り越え現在では、発電や工業、飲料水に利用され全国屈指の製紙産業や都市の発展を支えていることが分かった。そして、私が水切り石で遊ぶ銅山川は、雲母を含む石が多く、日光が当たると川がきらきらして見え、その用水は「黄金の水」とも言われ、金砂村には「史跡、砂金採取跡の碑」が建てられている。

私は、自分が今までまばゆい沿岸に建つ立派な煙突を見て、誇らしい気持ちを感じていたが、その発展する産業の陰には、水没する村があったと思うと切ない気持ちとなった。そして、その水資源の開発は、村を水没させるだけでなく小学校が廃校になるなど、村が過疎化するきっかけとなったと考えるようになった。また、平成の大合併で、山間部にある農山村主体の自治体が、平地部の都市と合併することで過疎化が進行するという、典型的な例も相まってへき地となったことが分かった。実際、雨戸の閉まった商店やトラックバスの船着き所を通る度に、祖母や父が昔利用した時の事を懐かしそうに話し、閉鎖して残念そうにして

愛媛県 松山市立南第二中学校 三年 松平 定久

いた。また、日暮れ時には、民家の灯りを探し、村民の生活を感じると何処かほっとした感じであった。私は、過疎化が止められなくても、関わる人として、集落の生活やダム湖の水位を心配するなど、関心を持ち続ける事が大切であると思った。また、近年近隣の中学校ではその昔農閑期の副業として砂金採りが行われていたことなど、ふるさとの歴史を知り、触れ合うことを目的として、銅山川で砂金採り体験が行われている。私は、輝かしい産業だけに注目するのではなく、その産業の基礎を成した銅山川やダムについて学習し、当時の人が未来に架けた思いを理解する事が大事であると思った。

三島の家には、中の川温泉を引いており、祖母は訪れる度に入浴を楽しみにしている。川の水を引いていることもあり、水道代が無料の温泉である。しかし、川の恩恵には土や落ち葉が含まれ、水道管を詰まらせ、お風呂や台所での給水が困難な時もある。祖母は、自宅からペットボトルに飲料水を何本も用意し、父は、寒い日も日暮れでも、文句を言うことなく、手慣れた感じで工具を持ち、外の水道管のゴミを取り除き、温かいお風呂を沸かしてくれる。私は、そんな家族の姿をみて、川の恩恵を受けるといえるのは、便利に改良するのではなく、川を理解し、手をかける事もいとわず、共生する姿勢が大切なのではないかと思った。

現在、銅山川3大ダムの貯水状況は平年を下回り、渇水対策が継続して行われている。瀬戸内海気候による降水の少なさは、今も変わらず人々を悩ませている。私達は、先人達が未来に託した思いを胸に、台風や気候に頼るだけではなく、水と共生する社会を私達の子孫のために次は自分達が考え続けなければならない。祖母がいつまでも温かいお風呂に入れるように銅山川と共生していきたい。

# 国土交通大臣賞（優秀賞）

## 水の重み

沖繩県 南風原町立南風原中学校 三年 平田 菜乃華

水。「私にとって水とは何だろう？」そう自分に問いかけた。普段当たり前のようにある水。「蛇口をひねれば水」という言葉は誰もが耳にしたことがあるだろう。そのため、身近にある水に対して特別に思うことはなかった。

しかし、ある写真を目にしてから水に対しての思いが変わった。学校でSDGsの学習をしている際に見た写真だ。二〜三歳の子が汚れたバケツに泥水を入れ、飲んでいる写真だった。異様な姿に驚いた。すごく悲しかった。「幼い頃からこの水を飲んでいいのか。」「いや、どんなに汚くてもこの水を飲むしかないのか。」心が痛んだ。この現状を変える方法はないのか、考えた。水をろ過すればきれいで安全な水が飲めるのではないかと思った。

そこで、私は「泥水を自作のろ過器を使い、安心安全な水にする」という自由研究をすることにした。浄水場のしくみを参考に、砂や石綿などを入れ、ろ過装置を作り、土と水をまぜ、石や草、虫が入った泥水を流した。ろ過を三回くり返し、二時間ほどでコップ一杯分の水ができた。初めの泥水よりだいぶ透明になったが、まだ安心して飲める水にはほど遠かった。その後、水を煮沸し、殺菌し、残った水をどのくらい汚れているか、薬品を使い調べてみた。するとものすごく汚れていた。結果、安心安全な水は自作のろ過器ではつくれなかった。

その時は、安心安全な水が毎日好きだけ飲めることにとっても感謝したいと思った。安心安全な水をつくることはとても大変だと実感した。浄水場で働いている方々に感謝の気持ちを伝えたいと強く思った。「どうしたら感謝の気持ちを伝えられるだろうか。」また、「私が感じた安心安全な水がすぐそこにあるありがたいみは、どうやったら多くの人に伝わるのだろうか。」考えた末、水道コンクリールのポスターを自分で描いて伝えようと思った。

水道局の人から話を聞いたり、本を読んだりして、自分の思いを伝える為に感謝の気持ちをこめた、ポスターを描いた。キャッチコピーは「命をつなぐ・水をつなぐ」浄水場で働いている方と、健康で元気な私達が水を飲んでいる絵を描いた。すると賞をもらい、様々なショッピングセンターでしばらく展示することになった。私のポスターを多くの人に見てもらうことができ、嬉しく、胸が熱くなった。私のポスターを通して、多くの人に安心安全な水は、浄水場の方やダムを管理をしている方の苦勞を経て、今の私達がいるということを考え直してほしいとあらためて思った。だから私は、来年も水道コンクリールのポスターを描きたいと思った。

蛇口をひねれば透明な水。何の心配もいらない水。おいしい水。好きな時に好きなだけ飲める水。これは当たり前じゃない、ということ。SDGsの授業で見た写真やろ過器を使った実体験を通して深く学んだ。「水を大切にしなさい。」「水に感謝。」「蛇口をひねれば水。」「今ではこれら一つ一つの言葉に重みを感じる。私達の生活に水は欠かせない。全ての人々が水と関わり生きていく。だからこそ、水のありがたみを知ってほしい。感じてほしい。私は、それを知って感じてもらうために、これからも自分にできることを探し、多くの人に伝えていきたい。

もう一度自分自身に問う。「私にとって水とは何だろう?」私はこう答える。「私にとって水とは日々感謝をする人生のパートナーだ。」

## 環境大臣賞（優秀賞）

### 手紙 琵琶湖のあなたへ

「私はあなたのことをよく考えもせず、食器洗いをした時、お皿に残ったマヨネーズをふき取らずに流してしまいました。いやな思いをさせてしまい、ごめんなさい。」

私が食器を洗っているのを見た母が「ああ」と声を出したので顔を見ると、とても残念そうにしていました。何かが遅かったようでしたが、私には理由がわかりませんでした。母が「一緒においで」と庭の地面にある土がついた白いふたを開けて私にみせました。そこには白いかたまりがぼろぼろと浮いていて、泡とともに生臭いにおいがしました。思わず「くさい、気持ちが悪い」と私はふたをしめました。すぐに母が言った言葉は「ふたをしめてもその油は消えたことにならないよ」と。

それから日がたつても、なんとなく地面の下が気になっていました。学校へ行く途中もマンホールの下に流れていく水のこと、その行く末が心配になりました。

翌日図書館へ行き、水のことを書いてある本を探しました。特に滋賀県の下水がどこに行くのか知りたかったので、『琵琶湖のカルテ』（今関信子著）を司書の方に紹介してもらいました。琵琶湖の水質などを調査し科学者達がまるで医者のように琵琶湖の状態を心配していました。私はその本を一気に読みました。そこには、人間の活動環境の変化が琵琶湖の調子を崩していることが書かれていました。合成洗剤により赤潮が発生、魚が多く死に、その水で洗たくをした布おむつを赤ちゃんが使用したことで肌がかぶれたことなど、色々な影響が出たことを知りました。私は滋賀県に住みながらも、合成洗剤をせっけんに変える「せっけん運動」のことを知りませんでした。今まで身近なところを見ようとせずに、水をよごしていることに無関心だった私は自分をはずかしく思いました。

### 滋賀県 近江兄弟社中学校 一年 福岡 周

家で使用しているせんたく洗剤の袋にかかっている成分を調べてみました。そこには、「界面活性剤、蛍光増白剤」の言葉が見えました。そのことも本に書かれていました。実験をすると合成洗剤を混ぜた水そうの中にアユを入れると死んでしまいました。水は透明できれいな水に見えたが、その蛍光増白剤は、洗たく物を輝くような白にします。その美しい白が、魚たちの命をおびやかしているのです。私はその悲しい実験の結果をみて、白い服が真っ白でなくてもいいのにと思いました。同時に私が着る制服の白いキャッターシャツを思い出しました。「琵琶湖の水をきれいにして魚たちが死なないように、私のシャツは真っ白でなくてもいい。」と、これから合成洗剤をせっけんにしていうと家族で話をしました。いまからは琵琶湖のために行動していきたいと思えます。そしてもう、マヨネーズを流してしまう私とはさよならします。この取り組みを新しい制服を着ている仲間にも広めていきたいです。きつと琵琶湖も生き物も喜んでくれるだろう。まずは自分が今、自分にできることから始めたい。

「琵琶湖のあなたへ、お久しぶりです。以前の私は、あなたはきれいな水で元気に過ごしていると思いきや、人間と共に生きること苦しいのでした。私が小学五年生の時に行ったフロアリングで船上からみたあなたは、緑っぽく顔色が悪くみえませんでした。私は生活を振り返ってみました。毎日使って流していた水のよごれや、水の行方を今まで知らずとしました。私は今自分ができることをしています。小さな行動なので、大きなあなたには何も感じないかもしれませんが、これから続けて、その活動を広めていきたいと思えます。あなたにこの先、私達人間と共に生きることを楽しんでもらえるように。また会いに行きます。さようなら。」

## 全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

### 大切な遊水地と共に

私が住んでいる砂川市には、遊水地がある。私の家の近くにあり、子ども頃から自転車で一週したり、釣りをしたりと親しんできた場所である。近くを流れる石狩川の氾濫を防ぐために造られたものだ。石狩川は、大雨により過去に何度も氾濫し、この砂川も被害を受けてきた。そのため、蛇行する川を工事で直線にし、残された蛇行跡を遊水地にしたのである。大雨で川の水量が増えたと、一時的にこの遊水地に水を引き入れ、水量を減らして洪水を防ぐ役割を持っている。

川を管理している人々のこうした努力のおかげで、今では石狩川が氾濫して被害を受けるといふことはなくなった。そのためか、石狩川や遊水地について、私自身あまり関心を持っていなかった。小学校の学習で、石狩川の氾濫の歴史や遊水地の役割などを学習したが、それきり考えることもなかった。だが、中学校でSDGsを学習する中、水を大切にすることが目標の一つに掲げられていることを知った。その根拠となるようなアフリカの子どもたちが泥水を飲んでる映像、干ばつによる不足の実態をテレビで観ているうちに、このままでいいのだろうか、改めて水について考えるようになった。

水は、私たちの命や暮らしを支える大切なものであり、みんなの手で守るべきものなのだと思えるようになった。

私たち日本人にしても、水道の無駄使いに始まり、下水道や河川の汚染、水不足など、深刻な水問題を抱えていることもわかった。水の管理はその専門家に任せておけばよい、自分一人くらい水をどう使おうが関係ない、という意識ならば、すぐに改めるべきだ。いつ水が使えなくなってもおかしくない危機が迫っているからだ。水が使えなくなれば、命にかかわる。だから、他人任せではなく、水を使う私たちこそが、共に水を守っていかねばならないのだ。私も、まず家で水道の節水や油を流さないことを確実に言うことにした。

北海道 砂川市立砂川中学校 三年 水島 颯一

遊水地に関わっても、その役割を理解し直すことができた。ただの水辺ではなく川の氾濫から私たちを守る大切な存在なのだ。この遊水地には、砂川に暮らしてきた人たちが石狩川を管理する人たちの苦勞の歴史が刻まれている。遊水地ができた背景にある、人の思いや歴史を私たちが受け継ぎ、この遊水地をこれからも大切にしていこうと思う。

遊水地は、私たちの暮らしを豊かにする役割も持っている。以前、遊水地の周りに桜の苗木を植えたことや、周りのゴミ拾いに参加したことがあった。当時は活動の目的など考えたこともなかったが、それは水辺の環境を整え、美しい景観にしていく活動だったのだ。水が、私たちの暮らしに豊かさをもたらすのだ。

今、遊水地は、「砂川オアシスパーク」として、夏はカヌーやヨット、冬はワカサギ釣りなどが楽しめる私たちの憩いの場となっている。水辺を彩る四季折々の景色は素晴らしい。桜の花に囲まれた水辺や、夕陽の中を渡り鳥が飛んでいく風景に心を奪われる。

水という存在が、私たちの命を育み、暮らしをより豊かなものにしてくれる。水の恩恵に感謝したい。だからこそ、水を大切にしながら水を守っていくこと、これが今の私たちに必要なことなのである。

先日も久しぶりに遊水地を訪れた。桜もそろそろ咲きそうである。帰る前に、落ちていたゴミを拾ってから帰った。自分が遊水地に植えた桜が、大きくなって水辺を彩っていく姿を、これからもずっと眺めていきたい。

この遊水地の環境を守る一人として、大切な水を守る一人として、これからもゴミ拾いなど小さなことから取り組んでいこうと思っている。



## 水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

### 感動のネットワーク水

静岡県 磐田市立磐田第一中学校 一年 佐藤 迪洋

落雷で断水になってしまった。水が飲めない、手が洗えない、トイレが使えない……どうしよう。この時母はおちついて言った。「備ちく水があるから、コップに必要量とって使つてね。手を洗う位ならおフロの水で十分よ。」おかげで断水の間、ほとんど迷わなかった。

備える事ができていたのは、十二年前の経験からだと言はう。東日本大しん災がおきた時、ぼくは関東にいた。まだ0歳だったぼくを育てるために、水は必須。飲み水は勿論、オムツかえ、おフロ、り乳食の調理、その食器もベビー服も授乳用品もきれいに洗って、衛生を保たねばならない。赤ちゃんを育てるためには想像以上に水が必要になってくる。今なら多少汚い手でもがまんできたり、なるべく水分せつ取をひかえようと思えるが、赤ちゃんは直接命に関わってくる。さらに赤ちゃんを育てる人の手も衛生を保つため洗わなくてはならないし、母乳を出すためには水分せつ取も必要になってくる。水がない中の育児で、母は本当に大変な思いをしたそうだ。

水道が使えるようになって、問題は続いた。水道水から基準値をこえる放射性物質が検出されたという事で、乳児は水道水のせつ取をひかえるよう呼びかけられた。多少買っておきしていた水は、ぼくの世話ですぐ無くなってしまったという。母は地元の店を全て回ったが、水売り場は全て空。ネットで水を探しても、売り切れだったそうだ。やっと通販で見つけたフランスの水を購入できたというが、やっと届いた水も、硬水だったので、乳児のじんぞうに負担をかけてしまう。結局ぼくには使えなかったそうだ。今あたり前に水道から出てくる水は、軟水だし、安心・安全、蛇口をひねればすぐに飲めるし使えるという、奇跡のような素晴らしい環境なのだと分かった。

社会科で行政について学習したのを機に、しん災の際、行政は水に関してどんな取り組みをしたか調べてみた。例えば、厚生労働省はひ災し

て間もない水道水がより安全に使えるよう、各都道府県に活性炭を活用する提案などをしてきていた。農林水産省は、大量の水が必要となる農業水利施設の水路などを復旧してくれた。国土交通省は飲料水提供や給水車のルート確保。給水車の燃料供給は経済産業省がしてくれた。水資源機構は漏水箇所への応急復旧や、水道用水・工業用水・農業用水の取水・通水までわずか七日で完了してくれていた。文部科学省は蛇口水を一年以上も毎日測定し続け、放射性物質が基準値以下かどうか測定してくれている。環境省は、公共用水域と地下水のモニタリングを続けてくれている。他にも全ての府省庁が、協力し、尽力してくれていた事が分かった。ぼくたちに水を届けるため、これ程のネットワークが働いていた事に、ぼくは涙が出る程感動した。

調べていて、おどろいた事がある。それは水資源機構の可はん式海水淡水化装置だ。ため池の水を水道水質基準適合レベルまでじょう化し、断水地域に供給してくれていたのだ。地球上の水の九十七％は海水だし、川やため池の水を飲める水にできる装置は、災害時に関わらず今後ますます必要になると思う。この技術に感動したぼくは、ペットボトルでろ過器を作った。静岡県で配布してくれている防災マニュアルや本、ネットで調べ、試行さく誤して作成した。最初はなかなかごりが取れなかったが、フィルターを色々な素材に変える事できれいになる事、び生物が水のじょう化に有効な事など、色々な事が分かってきた。いつも雨水をためて畑にまいたりスコップを洗うのに使ってきたが、これからはろ過水で手を洗う事に決めた。ろ過装置は災害時だけでなく、水不足などあらゆるきん急時に活やくすると思う。ぼくのろ過器はまだ手洗い位にしか使えていないが、安心して飲める位になるまで研究と改良を続けていきたい。たくさんの人に安全でおいしい水を届けるために。

# 独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「金賞の思いを捧げて」

埼玉県

川口市立高等学校附属中学校

二年

合葉

鴻太

「井澤弥惣兵衛ってすごいなあ！」

小学四年生のころ、僕はこの人物のとりこになった。井澤弥惣兵衛というのは江戸時代に活躍した紀州出身の役人だ。彼は、その優れた技術を用いて利根川から約六十キロにも渡って見沼代用水を引き、水害や水不足で困っていた人々を救った英雄だ。そんなことを教科書の「かわぐち」で学んでから、どんな戦国大名や偉人達とも比べられないくらい井澤弥惣兵衛のことが好きになった。

僕の住んでいる埼玉県には、川がたくさん流れている。荒川や芝川、利根川に江戸川……。有名な川の数々は埼玉県にある。しかし、水には水害もつきものだ。その年の大きな台風で芝川は氾濫寸前まで増水していたし、荒川も氾濫してしまった。だからこそ、埼玉県では古くから治水の試みがなされてきた。利根川と荒川を切り離した、伊奈忠治をはじめとする伊奈氏や、見沼代用水を引いた井澤弥惣兵衛は埼玉の有名な人だろう。彼らが作り上げた治水の遺産は今でも人々を助け、僕らの暮らしを支えてくれている。

なのに、今の見沼代用水や荒川は大切にされていない。もちろん、大切にしている人々がないという訳ではない。それでも、川を我が物顔で汚す人がいるのだ。橋に置かれたビールの空き缶。平然とごみ入りのビニール袋を捨てる人。ヘドロまみれのタイヤを捨てる人。火のついた煙草を面白そうに投げ込む人。川をごみ箱のように扱う人がいる。そんな光景を見るたびにこう考えてきた。

「ここは、あなたの川じゃない。ごみ箱じゃない。みんなのためにここを築き上げてくれた人がいる。大切にそれを守ってきた人がいる。」

そんなことを心から知ってほしい、と僕は熱望した。

そこで、彼らのことを人々に広めようと、理解してもらおうと、「かわぐち社会科マップコンテスト」への参加を決めた。

彼らのことを調べる過程で沢山の人々に話を聞いたり、色んな場所を見て回ってみたりした。かつての見沼溜井、芝川第一調節池、さいたま市立博物館。そこにいた、自身の体験を懸命に話してくれた人、当時の記録や状況を解説してくれた博物館のインストラクターさん。

全員が埼玉の川と、人々に尽くした彼らを敬愛していた。それらを通じて「井澤弥惣兵衛」や「伊奈忠治」のすごさを改めて実感した。だからこそ、今、汚されてしまった見沼代用水や荒川を思い浮かべると自分の無力さにますます腹が立つ。

「もつと川を、彼らの思いを大切にしてほしい！僕も地図に彼らの思いや功績を表したい！」という一心で作業に打ち込んだ。

治水を成功させたかつての技術、彼らの努力、情熱。そんなものを教科書以上に学ぶことができた。

でも、これで終わりではない。埼玉だけでなく日本全国に川や池、海があつて、そこに情熱を捧げた人々がいる。それらを必死で守ってきた人がいる。そのことを自覚し、責任をもってそれらを「使わせてもらう」ことが、これからの僕たちには必要なのだ。

僕のマップは金賞を取った。あなたの思いは、行動は彼らに果たしてどう評価されるだろうか。彼らは僕らのそばに、水のそばにいる。水を使う度に「ありがとう。」そう思えば、僕たちの川は、池は、海はきつと美しくなっていくはずだ。

## シャワーズ賞（優秀賞）

### うちの川

徳島県 神山町神山中学校 三年 中南 仁

ぼくは毎年、家のそばを流れる川で泳ぐのを楽しみにしている。部活動で汗をかいた後、つめたく透き通った川にとびこみ、リフレッシュすることがたまらなく好きだ。自分にとつてきれいな川の水は小さいころから身近なものであり、あたりまえのものであった。

しかし、その水があたりまえのことでないことをぼくはコマージュで知った。世界には水が簡単に手に入らなかつたり、せつかく手に入れても汚染されていたりするらしい。水道をひねればきれいな水が出てくることはあたりまえでないことに驚いた。

ぼくが住む神山町の山の川は清流と呼ばれ普段はおだやかで美しいが、ひとたび大雨が降ると突然水量が増え、茶色くにごった濁流へと姿を変える。その流れは山地の土砂災害や、下流の浸水被害をまねくこともある。一方、神山町には上水道の設備がなく山水を使って生活している人もたくさんいると聞く。その人たちにとつては、雨が降らないと生活に不便をきたすこととなる。つまり、山の水、川の水は多すぎても少なすぎてもいけないということだ。

近ごろ、「山に保水力がなくなった」という話を聞くことがある。山が水をキープしておく力がなくなったため、洪水や渇水など極端な状態が増えて、ちよūdどよい状態を保つことができなくなっているらしい。それはなぜか。ぼくはそれについて調べてみることにした。インターネットや町の広報誌などからは、山の保水力には、そこに植えられている樹種が深く関わっていると知った。そこで行政は、管理されていない山の境を明らかにし、行政に譲渡し、行政が管理していくという「森林境界明確化事業」を行っているということを知った。また、山に生えている針葉樹をすべて切りたおし、かわりに広葉樹を植えるという「樹種転換」を行っているということも知った。下級生や弟たちが、山に広葉樹の苗を植えに行ったことも、その一環らしい。なぜ、針葉樹のかわりに広葉

樹を植えるのか。ぼくはそう考えたとき以前祖父から聞いた話を思い出した。祖父が子どものころの鮎喰川は今よりもはるかに水量が多かったそう。上流の地域で切りたおした木材でいかだを組み、それに乗って下流の徳島市まで木材を運ぶ「いかだ流し」が行われており、下流域まで途切れることなく水量が豊富だった。しかし今の鮎喰川を見るとどこどころで川の水が途切れ、河床がむき出しになっており、いかだを流していたことなど想像もできない。そうなってしまった原因の一つは、この数十年で山に針葉樹が増えすぎたことであるらしい。昔の人が財産区で植えた杉やひのきが管理されず野放しにされており、それらの木々が雨水を大量にすい上げるため、川の水が少なくなってしまうそう。町が行っている「樹種転換」が山をもとの姿にもどすための取り組みであり、それが鮎喰川をもとの姿にもどすことにつながるということを知った。

このように水を美しく豊かに保つためには、山を整備することが大切だ。山間部に住むぼくたちが山のためにできることを考え行動することは、ぼくたちが水の恵みをいつまでも受けつづけるために必要なことであるということを実感した。ぼくは、これからも山の植林活動や清掃活動などに積極的に参加し、神山の美しい自然を守っていくための取り組みをつづけていこうと思う。

最初に述べたようにぼくは家のそばを流れる川を「うちの川」と呼び、四季折々のうつろいを楽しみにしている。特に夏の暑い日にキンキンにひえて透き通った水にもぐることを毎年楽しみにしている。自分の子どもたちにもこの「うちの川」を残し、大切に受け継いでほしいと思っている。

## 中央審査会特別賞（優秀賞）

清らかな水、尊い水

静岡県

常葉大学附属常葉中学校

一年

西ヶ谷

あかり

私の住む、静岡市清水区には、興津川という清流が流れています。毎年鮎釣りの季節になると、釣り人だけでなく、釣り人の姿を見るために、川沿いの遊歩道には人が集まります。鮎はきれいな川でしか育つことができないため、まさに清流の象徴で、興津川は私の住む町の自慢の一つです。

しかし、昨年九月、静岡県を台風十五号がおそいました。夜遅くから降り続く強い雨は、やむことなく警報が何度も繰り返されました。眠れない夜が明け、外を少し歩くと、町中に大きな被害もたらされていました。曾祖父のお墓の裏山が崩れ落ちています。冠水した道路、どこから流れてきた大きなゴミが散乱している。動けなくなった車には、くつきりと茶色い泥がついていて、信じられない高さまで水があがつてきていたのだということがわかりました。また興津川も美しかった姿は消え、茶色い水が勢いよく流れる恐ろしい姿になっていました。遊歩道は流れ着いた土砂と大木が押し寄せ、フェンスが曲がってしまっていました。

断水になることを知らせる広報静岡が流れるとまもなく、蛇口から水が出なくなってしまうました。興津川の取水口に土砂が流れ込み、取水できなくなってしまうのです。そして、道路が寸断され、土砂が家を飲み込んだ地域、家や生活に必要な物を失った方がたくさんいることが次々とわかり、これはただごとではない、と不安になりました。

JRは運休、車は通行止めとなり、私たちの周りのスーパー、コンビニから一瞬で水がなくなりました。汗をかいてもお風呂にも入ることができません。トイレの水を流すこともできませんでした。

一晩経ち給水車が来てくれることになりました、という連絡を当時組むの班長だった母が家々に走って知らせていました。しかし、給水を待つ列は、四時間待ちです。こんなに水を手に入れることが難しいなんて。

今まで当たり前のように蛇口から出てきた水がこんなに貴重なものだななんて、気づきもしませんでした。不安は募るばかりです。

そんな中、「井戸水あります。使ってください。」段ボールに書かれた手作りの看板が、あちらこちらに出始めました。また、両親のところには、「大丈夫。水送るよ。」や「今からお水届けに行くからね。」と遠いところから、ニュースを知り、荷物を送ってくれる人、車で届けてくれる人の存在がいました。看板を見るたびに、母が「ありがたいね。」と話をすると、私の周りのあたたかさを感じ、勇気が出ました。また、給水車は日に日に台数が増え、全国から来てくださる給水車の多さに、不安だった水の存在は、感謝の水に変わりました。

驚いたのは、母が「まだ私たちより困っている人がいるから。」と届けてもらったお水を、重い水を運べずに困っている人のところに運んでいったことです。「何かできることはあるかな。」自分たちもたくさん助けられました。その感謝の水は、気持ちのせて、めぐる水になりました。

久しぶりに蛇口から水が出た日、トイレの水を流すことができた日。水ってこんなに勢いよく流れていたのだ。慌てて蛇口をしめました。

しばらくは茶色く濁ったままの興津川がやっと元の美しい川の色に戻りました。こんなに美しい川の様子も今までとは少し違います。むき出しの斜面がそのままの状態のか所もいくつもあります。流木や土砂が流れ着いたままの場所もあります。それを見るたびに、あの日を思い出します。いつまでもこの清らかな水を守るように自然を大切にしたいです。そして、尊い水の存在と、この経験を無駄にしないように生活していきたいと思います。